

Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(8)

大 矢 温

はじめに

今回は 2007 年にモスクワで出版されたタラーソフ編集のチュツチェフ著作集『ロシアと西洋』の中で「哲学詩」として分類されている詩作を中心に分析をする¹⁾。

1) 無題²⁾

郷から郷へ、町から町へ
運命は、旋風のごとくに、人々を吹き散らす、
お前は嬉しいか、嬉しくないのか、
それは何を欲しているのか？…前進、前進！

風は我々に馴染みの音を運んできた：
それは愛の最後の別れの言葉…
我らの背後には多くの、多くの涙が、
行く手には霧が、不可知が！…

『おお、振り返り給え、おお、立ち止まり給え、
どこへ走っていくべきか、何のために走るべきなのか？…
愛はお前の後ろに取り残された、
一体世界のどこによりよいところを求めるべきなのか？

愛はお前の後ろに取り残された、
涙ながらに、胸には絶望を抱いて…
おお、己の愛いに哀れみを、
己の至福を慈しみ給え！

その至福を幾、幾日も
己の記憶に止め給え…
お前の心に愛しいものをすべて
お前は道すがら手放しているのだ！』

亡霊を大声で呼ばわるときではない：
このときすでにこんなにも暗い。
亡き面影はなおさらいたましい、
我らにとって生前により愛しければそれだけ。

郷から郷へ、町から町へ
全能の旋風が、人々を吹き散らかす、
お前は嬉しいか、嬉しくないのか、
それは尋ねない…前進、前進！

1834年に発表されたハイネのSalonの中のEs treibt dich fort / Von Ort zu Ort...をロシア語で改作したものとされている。ミュンヘン公館時代の同僚であったИ. С. ガーリンに送られた一連の詩作の中に含まれているので1836年4月以前に作られたものと考えられている³⁾。場所の移動、時の経過によって不可避免的に失われるものについて、それを「運命」とチュツチェフは観念している。抗う術もなく運命に翻弄される人間、というローマン的なモチーフだが、ここには人間の主観には無頓着に働く自然に対するチュツチェフの諦観を見ることもできよう。「無題（草原からトビが飛び立った…）」⁴⁾、「無題（見よ、川面の広がりに…）」⁵⁾、あるいは「秋の夕べ」⁶⁾などに通じるモチーフである。

2) 無題⁷⁾

灰青色の陰が溶けあい、
色は褪せ、音は静まりかえった—
生命は、活動は
不明瞭な薄暗がり、彼方のざわめきとなった…
目に見えない蝶の飛翔が
夜の空気の中で聞こえる…
言いようのない憂いの時よ！…
すべては私の中にあり、私はすべての中に！…

静かなる薄暗がりよ、まどろむような薄暗がりよ、
我が心の深みに染みわたれ、
静かな、物憂げな、香ばしき薄暗がりよ、
すべてを満たし、鎮めておくれ—
意識を忘我の闇で
満ちあふれさせておくれ！…
消え無くならさせておくれ、
まどろむ世界と混ぜ合わせておくれ！

「灰青色の陰が溶けあい」「色は褪せ」「音は静まりかえった」とチュッチェフが詠う、無底のカオスたる夜の闇についての詩である。人間はこの夜の闇に浸ることで「まどろむ世界と混ぜ合わ」され、「我・非我」の区別を失い、自然と一体化し、「消え無くなる」のである。「我・彼」の別を前提としたコミュニケーションに対して有機的に一体となり繋がるコミュニケーションの形を提示した「Silentium!」⁸⁾に通じるものを感じさせる詩である。それと同時にこの詩は、前期シェリング思想の絶対的自我や同一哲学の影響を強く感じさせるものでもある⁹⁾。

3) 無題¹⁰⁾

何と人^{ひと}気のない溪谷だろう！
私に向かって泉が流れている—
それは谷の新居へと急ぐ…
私は樅の木が立つ、高みへと這い上がる。

ほら私は頂上にたどり着いた、
ここに座る、嬉しい気持ちで静かに…
泉よお前は、谷間の人々の所へと、急ぐのだ—
試すがいい、彼らのところがいかなるものかを！

超然と心安く高みに座す作者は、人里へと流れ下る泉に向かって「試すがいい、彼らのところがいかなるものかを！」と語っている。一見、「空へと高く舞い上がった」「トビ」に対して「汗だくでほこりにまみれ」「大地に生え付いてい」る「大地のツァーリ」たる「私」を対比した「無題（草原からトビが上がった…）」¹¹⁾とは正反対の構図に見えるが、基本的に両作品とも地上に拘束された人間と自由な天上の対比、という構図をもっている。それ故、「高みへと這い上がり」、俗世間の拘束から解放された「私」は「嬉しい気持ち」なのだ。この詩もまた、1836年にガガーリンに送られているので、それ以前、1830年代の作、と考えられている¹²⁾。

4) 無題¹³⁾

一人、黙して
消えつつある暖炉の前に座っている
涙ながらに眺めている…
憂いをもって過去に思いを巡らせる
そして私の憂鬱の中に

Ф. И. Чюцчюф政治詩試訳(8) (大矢 温)

言葉を見いだせずにいる。

かつて過去があったのか？

今あるものは—永遠に存在するのか？

それは過ぎ去っていく—

すべてが過ぎ去ったように、それは過ぎ去っていく、

そして暗い穴の中へと沈んでいく

一年また一年と。

一年また一年、一世紀また一世紀と…

何を憤激するのか人間よ、

この大地の草木よ！…

それは早く、早くしおれていく—このとおり

だが、新たな夏とともに新しい草木が、

別の葉が。

そして再び今あるすべてが有るだろう、

そして再び薔薇が咲くことだろう

そしてトゲもまた…

だがお前よ、私の惨めな、惨めな花よ、

すでにお前に復活はない、

咲き誇れないのだ！

お前は私の手でもがれた、

いかなる至福と憂鬱とともにか、

それを知っているのは神！…

私の胸の中に留まってくれ、

愛がその中で最後の一息を

止めるまで。

上記の「1) 無題 (郷から郷へ、町から町へ)」と同様に、チュッチェフが 1836 年 4 月 (旧暦) に同僚のガガーリン宛に手紙を送った際に、それに添えて送った一群の詩のうちの一編¹⁴⁾。この手紙の中でチュッチェフは「私の全存在を覆すような」事件に言及している¹⁵⁾、この詩もその事件との関連で解釈すべきであろう。チュッチェフの伝記の作者であるピガリョーフは、これを、後にチュッチェフの二人目の妻となるエルネスチーナとの仲を悲観した最初の妻、エレオノーラの自殺未遂事件であると推測している¹⁶⁾。とすると、この詩のテーマは「私の手」によって破滅した女性に対する愛の未練だが、その背景には、類として永久に死と復活を繰り返す自然の営みに対して、一度だけの人生を生きる個々の人間の人生に着目するチュッチェフの実存主義的な思想を見ることができよう。そのためか、ノヴィコフとともにザマレイエフらもこの詩を「哲学詩」として分類している¹⁷⁾。

5) 噴水¹⁸⁾

見よ、生きた雲となって
 きらめく噴水が巻き上がる様を；
 その湿った煙が太陽に
 燃え上がる様を、はじけ散る様を。
 それはビームとなって、空へと上がり、
 秘められた高みに触れた—
 そして再び火色のしぶきとなって
 地上に落ちる運命なのだ。

おお必滅の思想の放水よ、
 おお、無尽蔵の放水よ！
 いかなる無常の法が

Ф. И. Чувтchef政治詩試訳(8) (大矢 温)

おまえを導くのか、おまえを乱すのか
お前はへとどん欲に空に向かってはぜるのか！…
しかし目に見えぬ宿命的な手は、
お前の頑強なビームを折り曲げて、
しぶきの中で高みから引き下ろす…

この詩もまた、1836年にガガーリンに送られた一連の詩に含まれているので、30年代前半の作と考えられている¹⁹⁾。「ビームとなって、空へと上がり」「どん欲に空に向かってはぜる」にもかかわらず、「宿命的な手」によって「高みから引き下ろ」され「地上に落ちる運命」とチュツchefが詠う噴水に人間の運命を見ることは容易であろう。仏教的無常観にも通じる「必滅の思想」である。

6) 無題²⁰⁾

まばゆい雪が谷間に輝いていた—
雪は融け、そして消えた；
春の草木が谷間で輝いている—
草木は枯れ、消えていく。

しかしいかなる^{グ=2}時代が白むのか
かの雪の高みで？
が、夜明けは今蔭く
新鮮な薔薇をその上に！…

この詩もまた、ガガーリンに送られた書簡に含まれているので、1830年代前半の作と考えられている²¹⁾。上記の「無題（何と人気のない溪谷だろう…）」、あるいは「噴水」と同様に上下の対比である。季節の移ろいとともに変化する、はかない「谷間」（下）と荘厳な「高み」（上）の夜明けが対比されている。

チュッチェフには、この詩より少し前の1830年に、やはり山をテーマにした「アルプス山脈」という詩作がある²²⁾。これはアルプス山脈に寄せて、スラヴ民族を糾合するロシアのツァーリの姿を描いたものだった。それとの関連を考慮するなら、「いかなる時代が白むか」との問は、新たな治世への期待と読み解くことができる。この詩の創作年代から判断すると、この「治世」とは、ロシアのツァーリではなく、チュッチェフ自らも外交官としてその即位に関与したギリシア王オトンのことと考えることができよう²³⁾。ただし、この点については確証がないので指摘するに止める。

7) 無題²⁴⁾

お前の瞳には感情もない、
お前の言葉には真実もない、
お前の中には魂もないー

がんばれ、心よ、最後までー
被造物の中に**創造主**はいない！
祈祷の中に意味もない！

謎の多い作品である。信じる人に裏切られたのであろうか、あらゆるものに絶望し、従来の汎神論的な世界観すら放棄しているように見える。そのような絶望の中で懸命に自らを奮い立たせようとしている様子がうかがえるが、具体的な状況は不明である。異説はあるが、ガガーリンのアルヒーフに含まれていたことから1836年に送られた一連の詩の一部と考えられている。また同様に、この詩が宛てられた人物についても異説はあるが、全集の編者は「不明」としている²⁵⁾。この詩を「哲学詩」に分類しているノヴィコフやタラーソフらもまた、この詩の創作年代を1836年以前、「お前」に相当する名宛人については「不明」としている²⁶⁾。

8) 1837年2月29日²⁷⁾

誰の手による死の弾丸が
詩人の胸を引き裂いたのか？
誰がこの神の杯を
壊したのか、土器のごとくに？
我らの地上の法の前で、
その者に咎があろうとなかろうと
彼は至高の手により永久に
皇帝殺しの烙印を押された。

だが、夭折の闇の中へと
光あふれるこの世から突然、飲み込まれた、お前よ、
平安を、お前に平安を、おお詩人の面影よ、
光あふれる平安をお前の靈に！…
世間の無駄口には不都合だが
お前の運命は偉大で神聖だった！…
お前は神々の生ける器官だった、
だが血管には血が…燃えるような血があった。

その高潔な血によって
お前は体面を保った—
民衆の悲しみの旗に
覆われお前は眠りについた。
流された血を感じる者に
お前の敵意を判じさせよ…
お前を、初恋のごとく、
ロシアの心は忘れない！…

決闘に於いてプーシキンを倒したダンテスに対する厳しい指弾から、チュッチェフのプーシキンに対する共感^{共感}は明白である。「神々の生ける器官」たるプーシキンではあったが、神ならぬ生身の人間としてのプーシキンにおいて唯一、欠けていたところは、彼が「燃えるような血」を持っていたことである。プーシキンの血管の中に流れる「燃えるような血」は人間としてのプーシキンの本質、自由の謂いであった²⁸⁾。チュッチェフにとってプーシキンの破滅の原因は、まさにその「血」にあったのだと総括されている。

9) イタリアのヴィラ²⁹⁾

世間の煩忙に別れを告げて、
糸杉の木立の陰に覆われて、一
至福の陰に、^{エリュシオン}極楽の陰に、
^{ヴィラ}それは善き時に眠りについた。

そしてすでに2世紀かそれ以上がー
おとぎ話のような空想に囲まれて、
その花咲く地所に眠って、
^{ヴィラ}それは天の御意思に身を任した。

だがここでは天はこんなにも地に優しい！…
そして何回もの夏、暖かい南国の冬が、
その上を半ばまどろみつつ吹き渡るー
その翼で^{ヴィラ}それに触れもせずに。

かつてのままに噴水が片隅でざわめいている、
天井の下でそよ風がそよいでいる、
そして一羽のツバメが飛び込んできてさえずっている…

Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(8) (大矢 温)

そしてそれは寝^{グイラ}っている…そしてその眠りは深い！…

我々が入った…すべてはかくも穏やかだった—
すべてはかくも遠い昔から安らかで暗い…
噴水がささやいていた…動かず、端正に
隣の糸杉が窓を覗いていた…

.....

突然すべては平静を失った：発作的な震えが
糸杉の枝々を走り抜けた、—
噴水は沈黙した—そして何か不思議なざわめきを、
あたかも眠りの向こうからのごとくに、不明瞭にささやいた。

これは何だ、友よ？あるいは悪しき生命が訳あって、
あの生命が、—ああ！—その時、何が我らの中に流れていたのか、
あの悪しき生命が、その不穏な情熱とともに、
禁じられた境界を超えてやってきたのか？

神に祝福され、神意の秩序の中で何世紀もたたずむ南国イタリアのヴィラ。そこでは「日半ば」³⁰⁾に通じる、まどろみのカオスの中で永遠の時間が流れている。ところがこの静寂は「我々が入った」ことによって突然、失われる。人間の介入によって神意の自然的秩序が乱されるのだ。「我々」とは誰か、そして「我らの中に流れていた」「悪しき生命」とは何か、読み手に多くの謎を残す詩である。おそらくこの「悪しき生命」とは、上記『1837年2月29日』の「燃えるような血」に通じる概念であろう。人間に限らず、カオスの普遍性の中から「非我」と「我」を分かちことによって生まれる被造物は、本質的に悪を内包するのである³¹⁾。チュツチェフが1837年11月にトリノ公館の上級書記官に就任した直後、1837年12月の作とされている³²⁾。

10) 春³³⁾

いかに運命の手がさいなもうと、
いかに嘘が人々を苦しめようと、
いかに額にしわがよろうと、
そしていかに心が傷だらけだろうと、
いかに厳しい試練によっても
あなたは征服されなかった—
このことは残る、初春の息吹と
出会いを前にして！

春は…あなたについて知らない、
あなたについて、悩みについて、悪について、
そのまなざしは不死の輝きをたたえ、
そして額にはしわもない。
自らの法にのみ従い、
約束の時にあなたのもとへ飛んでくる
それは明るく、法悦的に無頓着だ、
いかにも神々にふさわしく。

地上に花を振りまき、
初春は、新鮮だ；
その前に別の春があっただろうか—
それは知らない：
たくさんの雲が空には漂う、
だがその雲はこの春のもの、
それは跡も見出さない
色あせた幾多の春の暮らしの。

過去を思って薔薇はため息をつき、
夜更けにウグイスが歌うのではない、
過去を思って芳しき涙を
オーロラが放つのではない—
不可避の最期の恐怖が
木から葉を吹き払うのではない：
それらの命は、果てなき大海のごとく、
すべて現実の中で広がっている。

個別的な生活の戯れにして犠牲者よ！
来たれ、そしてはねのけよ、感覚の偽りを
そして飛び込め、力強く、横暴な、
この恵みの大海へ！
来たれ、そのエーテルの流れで
苦難の胸をすすげ—
そして神的な全世界的な生命に
たとえ一瞬たりとも関与せよ！

1939年の雑誌『同時代人』に掲載されたところから、この号が検閲を通過した1838年12月以前の作と考えられている³⁴⁾。

この詩もまた普遍的な運動としての自然と、個別的な個人の人生との対比がテーマになっている。一度限りの人生の中で苦悶する人間と、そのような個人的・個別的な生活には無頓着に運動する自然とが対比されている。自然に巡り来る春は、一般的・普遍的現象であるし、薔薇、ウグイス、オーロラといった被造物は「すべて現実の中で広がっている」とされる。チュッチェフの汎神論的な自然観である。これに対して人間の人生は、個別的・特殊な現象であり、「偽り」とされる。すでに述べたようにシェリング哲学においては神的普遍のカオスから神ならぬ人間は「我」を定立することによって成り立ち、それ故、本質的に悪を内包す

る存在とされるので、この詩もその文脈で解釈すべきである。

11) 無題³⁵⁾

殺人的な面倒事の中で

人生もが、石の山のように一我々皆にとって忌まわしい時、
我らの上に横たわる時、一突然、どこからは神のみぞ知る、
我らの心に喜ばしいものが吹き寄せる一
過去が我らをとらえて包む
そして恐ろしい重さがほんの一瞬持ち上がる。

だから時々、秋には、

平原にはすでに何もなく、茂みの葉が落ちた時、
空がますます淡く、谷がますます曇る時、
突然、暖かく湿った風が吹き、
その前に一枚の落ち葉を駆り立てる
そして心を包んでくれる、春風のごときにて…

俗世の些事に忙殺され、「人生もが」「忌まわしく」さえ思われるようになったチュッチェフは、深まりゆく秋という自然の秩序の中で、「突然」の「風」という偶然が運ぶ「過去」に慰めを見出している。1849年10月の作とされているので³⁶⁾、「心に喜ばしい」「暖かく湿った風」とは、この年の夏を家族とともに故郷のオフスツークで過ごした思い出と無縁では無かろう。また、この詩の制作時期は、彼が『ロシアと革命』を書き終え、『教皇とローマ問題』を執筆していた時期と重なる。あるいはこれが彼にとっての「殺人的な面倒事」だった可能性もある。

12) ロシア女性に³⁷⁾

太陽と自然から離れて、
光と芸術から離れて、
生活と愛から離れて
お前の若き日々はまたたき、
生き生きとした感情は生気を失い、
お前の夢は吹き消える…

そしてお前の人生はひそかに過ぎ去る、
人無き、名無き地にて、
しがない土地にて、
もくもくとした煙が消えていくように
どんよりとした霧に包まれた空で、
秋の際限のない濃霧の中で…

1848年から49年の作とされている³⁸⁾。具体的にいかなる「ロシア女性に」宛てられた詩かは不明。後にドブロリューボフはツルゲーネフの『その前夜』に対する評論『その日はいつ来るか』の中で、「ひろい行動のための、ひらかれた舞台」が欠如したロシア社会を批判する文脈でこの詩を引用しているが³⁹⁾、これは「大改革」期の世相を背景にした議論であって、チュッチェフの本意ではない。「もくもくとした煙が」「際限のない濃霧の中」に消えていくように「生き生きとした感情」が「生気を失」うロシアにおける女性の境遇を描いた詩ではあるが、チュッチェフ自身、ドブロリューボフのように批判的ではないにしろ、このような境遇に同情しているのか、あるいは一種諦観しているのかは判じがたい。

とはいえ「西」に対して「東」の大国たるロシアの意義を主張した40年代の一連のチュッチェフの政論の文脈の中で見れば、この詩において、西欧との比較においてロシアを見るチュッチェフの視角は明らかである⁴⁰⁾。

13) 無題⁴¹⁾

なんと煙の柱が高みで輝くことか！
なんとおぼろげな陰が滑り降りることか！
「ほら、これが私たちの人生、一君は僕に語った、一
月に輝く、明るい煙ではなく、
煙から逃げる、あの陰が…」

上記の「ロシア女性へ」の主題を引き継いだ詩である。この詩の中でチュッチェフは、月光に映えながら夜空を立ち上っていく煙を「君」と見ながら会話していることになっている。実生活でのチュッチェフの妻はいずれもドイツ人なので、「ロシア女性」ではない。愛人のエレナ・デニーシェヴァがロシア人なので彼女の可能性もあるが、彼女との「最後の愛」が始まる時期を1850年末とすると⁴²⁾、1849年の作とされる⁴³⁾、この詩における「君」は、デニーシェヴァ以外の別の女性になる。したがって、「煙から逃げる、あの陰」とは、愛人デニーシェヴァとの道ならぬ愛の行く末ではなく、上述の「ロシア女性へ」に通じる、作者の同情、あるいは諦観ということになる。

14) 無題⁴⁴⁾

人の涙よ、おお人の涙よ、
あなたは時により早く遅く流れる…
世に知られぬ涙が流れる、ひそかな涙が流れる、
つきることない、数知れない涙が、一
流れる、雨水が流れるように
人無き秋に夜の時に。

ロシア国立文学アルヒーフに残された手稿が、上述の「無題（殺人的な面倒ご

との中で…」と同じ紙に残されていたところから 1849 年秋の作とされている⁴⁵⁾。人の涙を謳った詩だが、なぜザマリエフやタラーソフらが「哲学詩」に分類したかは不明⁴⁶⁾。

15) 無題⁴⁷⁾

なんと彼はふるさとの樅を愛したことか
おのれのいとしいサヴォイの一
なんとメロディアスにざわめくことか
彼の頭上の樅の枝は…
樅の厳かで重苦しい闇と
荒々しく物憂げなざわめきは
いかなる甘美な思いによって
彼の理性を魅惑するのか！…

自筆の原稿に「1848」と書かれているので 48 年の作とされているが、翌 49 年に発表されたフランスのロマン派詩人アルフォンス・ド・ラマルティエヌ Alphonse Marie Louis de Prat de Lamartine の作品 *Les Confidences* にも同様なモチーフがあることから、49 年以降に書かれたものとする研究者もいる⁴⁸⁾。ラマルティエヌは 1848 年の 2 月革命の後、フランス臨時政府の外務大臣を務めているので、この詩は彼が外務大臣在任中に書かれたことになる。他方、特にこの時期のチュッチェフにとって『ロシアと革命』に著されているように、ロシアとフランス革命政府は不倶戴天の関係であるはずである。にもかかわらず、あえてこの詩にチュッチェフが着目した意図が不明である。

全集の編者はその間の事情として、1930 年代にチュッチェフの詩集を編纂したチュルコフが、ラマルティエヌが東方問題の解決策として、コンスタンチノーポリをロシアが、エジプトを英国が、そしてシリアをフランスが領有することを提案していた点にチュッチェフが共感したのではないかと、この説を提唱している

ことを指摘している⁴⁹⁾。従来この詩は「政治詩」あるいは「哲学詩」として取り上げられてこなかったが、その意味で「政治詩」ということになる。

おわりに

タラーソフ編集のチュツチェフ著作集の中で「哲学詩」として分類された164篇の詩作の中で、6巻本全集第1巻に所収されている詩作は、今回ですべて訳出したことになる。次回以降で6巻本全集第2巻に所収されている、残りの詩作の分析を続けたい。

注

- 1) Тарасов Б. Н. ред. Ф. И. Тютчев: Россия и Запад. М., 2007. «*** (Из края в край, из града в град...)» // С. 118; «*** (Тени сизые смешались...)» // С. 120; «*** (Какое дикое ущелье!...)» // С. 120; «*** (Сижу задумчив и один...)» // С. 122; «Фонтан» // С. 123; «*** (Яркий снег сиял в долине...)» // С. 123; «*** (И чувства нет в твоих очах...)» // С. 124; «29-ое января 1837» // С. 125; «Итальянская villa» // С. 125; «Весна» // С. 126; «*** (Когда в кругу убийственных забот...)» // С. 128; «Русской женщине» // С. 129; «*** (Как дымный столп светлеет в вышине!...)» // С. 129; «*** (Слезы людские, о слезы людские...)» // С. 129.
- 2) Тютчев Ф. И. «*** (Из края в край, из града в град...)» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002-2004 (далее "Тютчев"). Т. 1. С. 157.
- 3) См. "Комментария" // Тютчев. Т. 1. С. 433.
- 4) 拙稿「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(5)」、『文化と言語』第67号、2007年11月、100頁参照。
- 5) 拙稿「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(6)」、『文化と言語』第68号、2008年3月、112-113頁参照。
- 6) 拙稿「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(7)」、『文化と言語』第70号、2009年3月、98頁参照。
- 7) «*** (Тени сизые смешались...)» // Тютчев. Т. 1. С. 159.
- 8) 「試訳(7)」、94-95頁参照。
- 9) 坂庭氏はチュツチェフの「すべては私の中にあり、私はすべての中に」という詩行とシェリング哲学の全一性の思想との近似を指摘している。坂庭敦史、早稲田大学大学院文学研究科博士論文『フォードル・チュツチェフ研究』、2004年、54頁参照。また、この詩はザマレリエフ他の編集による『ロシア哲学詩』にも所収されている。Новиков А. И. сост., Замалеев А. Ф. отв. ред. Русская философская поэзия. С-Пб., 1992. С. 128. なお、先行訳については坂庭同書50頁を参照。
- 10) «*** (Какое дикое ущелье!...)» // Тютчев. Т. 1. С. 160.
- 11) 「試訳(5)」、100頁参照。
- 12) См. "Комментария" // Тютчев. Т. 1. С. 439.

- 13) «*** (Сижу задумчив и один...)» // Тютчев. Т. 1. С. 165.
- 14) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 444.
- 15) Письмо И. С. Гагарину от 20-21 апреля 1836 г. // Тютчев. Т. IV. С. 44.
- 16) *Лигарев К.* Жизнь и творчество Тютчева. АНССР. М., 1962. С. 90.
- 17) См. Русская философская поэзия. С. 122.
- 18) «Фонтан» // Тютчев. Т. 1. С. 167.
- 19) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 445.
- 20) «*** (Яркий снег сиял в долине...)» // Тютчев. Т. 1. С. 168.
- 21) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 448.
- 22) 大矢他「Ф. И. Чюцчюф政治詩試訳(2)」、『文化と言語』第64号、2006年3月、94頁参照。
- 23) 拙稿「〔Ф. И. Чюцчюфとギリシア独立問題〕、2006年3月、中央大学法学会『法学新報』第112巻、第7/8号参照。
- 24) «*** (И чувства нет в твоих очах...)» // Тютчев. Т. 1. С. 172.
- 25) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 453.
- 26) См. Русская философская поэзия. С. 504.
- 27) «29-ое января 1837» // Тютчев. Т. 1. С. 175.
- 28) この点、Чюцчюфの詩『1825年12月14日』においてデカプリストによって流された「血」との関連を指摘した坂庭氏の説は説得力がある。坂庭前掲書 46-48頁参照。
- 29) «Итальянская villa» // Тютчев. Т. 1. С. 180.
- 30) 「試訳(5)」、90頁参照。
- 31) 上述の坂庭氏は、Чюцчюфの詩における人間の「『悪』の要素」とシェリングの『人間的自由の本質』における「『悪』の概念」との同一性を指摘している。坂庭前掲書、91-93頁参照。
- 32) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 463.
- 33) «Весна» // Тютчев. Т. 1. С. 183.
- 34) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 466.
- 35) «*** (Когда в кругу убийственных забот...)» // Тютчев. Т. 1. С. 206.
- 36) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 496.
- 37) «Русской женщине» // Тютчев. Т. 1. С. 209.
- 38) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 499.
- 39) Добролюбов Н. А. “Когда же придет настоящий день?” // Собрание сочинений в девяти томах. М., 1963. Т. 6. С. 137.
- 40) 「無人」という概念からの分析がある。坂庭前掲書、188頁参照。
- 41) «*** (Как дымный столп светлеет в вышине!...)» // Тютчев. Т. 1. С. 210.
- 42) См. *Кожин В. В.* Пророк в своем отечестве. М., 2001. С. 255.とはいえ、Чюцчюфの年代記にエレナ・デニーシェヴァの名が初めて登場するのは1846年のことなので、この詩の「君」がデニーシェヴァである可能性も否定できない。См. *Динесман Т. Г. и др.* Летопись жизни и творчества Ф. И. Тютчева. Кн. 1. С. 51.
- 43) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 500.
- 44) «*** (Слезы людские, о слезы людские...)» // Тютчев. Т. 1. С. 211.
- 45) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 501.
- 46) См. Русская философская поэзия. С. 129.
- 47) «*** (Как он любил родные ели...)» // Тютчев. Т. 1. С. 212.
- 48) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 1. С. 502.
- 49) Там же.

CULTURE AND LANGUAGE, No. 71

(本研究は、平成 21 年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。)

(本研究は、科研費 (基盤研究(B)21330030) の助成を受けたものである。)